

授業に積極的に参加している児童は動機づけが高いのか？

—授業雰囲気による学級別の検討—

(中間報告)

香川大学 大久保 智 生

神戸市立北須磨小学校 江 村 早 紀

Were school pupils who were positively participating in the class high motivated?

Kagawa University OKUBO, Tomoo

Kitasuma Elementary School, Kobe EMURA, Saki

要 約

本研究の目的は、授業に積極的に参加している児童は授業への動機づけが高いのかを教室授業場面の中で検討することであった。具体的には、授業中の行動の中でも「挙手一指名」に焦点を当て、授業への動機づけとの関連について、授業雰囲気による学級別に検討した。小学校 3～6 年生の 7 学級 265 名（男子 133 名，女子 132 名）に質問紙調査と観察調査を実施した。質問紙調査では、授業への動機づけと授業雰囲気を測定した。観察調査では、児童の挙手と指名の数について測定した。まず、学級の授業雰囲気の得点によって、クラスター分析を行った。その結果、学級が「統制型」学級、「無気力型」学級、「自由・喧騒型」学級に分類された。今後は、分類された学級ごとに、「挙手一指名」と授業への動機づけの関連を検討する。

【キー・ワード】動機づけ，授業場面，授業雰囲気，児童

Abstract

The purpose of this study was to examine if school pupils who were positively participating in the class were high motivated. A questionnaire of motivation to class scale and class atmosphere scale and a observation of class were administered to 3rd to 6th grade students (133 boys and 132 girls). At first, Cluster analysis was performed with class atmosphere scale. The results of the analysis showed that classrooms were classified into controlled class, helpless class and bustling class. This study is needed to examine the relationship between behavior in class such as raising the hand and nomination, and motivation to class.

【Key words】 motivation, class, class atmosphere, school pupils

問題と目的

一般に、授業の中でよく手を挙げるなどの授業に積極的に参加している児童は授業への動機づけが高いと考えられている（江村・大久保，2011）。したがって、教師は授業に積極的に参加している児童の行動を児童の関心・意欲の現われと考えるのである。

授業場面における児童の積極的な行動を扱った研究として、布施・小平・安藤（2006）の研究が挙げられる。布施・小平・安藤（2006）は、積極的授業参加行動として、「注視・傾聴」「挙手・発言」「準備・宿題」の3つを挙げ、これらの行動と動機づけの関連を検討している。その結果、積極的授業参加行動と動機づけとの間の関連が示されている。しかし、布施・小平・安藤（2006）は、授業場面における児童の積極的な行動を質問紙で測定しているため、実際の行動を測定しているわけではない。教師は児童の積極的な行動を見て、関心・意欲を判断することからも実際の授業場面における積極的授業参加行動の頻度から、授業への動機づけとの関連について検討する必要がある。

積極的授業参加行動の中でも「注視・傾聴」「準備・宿題」については、授業の中で把握することが困難であるため、最も教師によって把握しやすい挙手に焦点を当てて検討することとする（江村・大久保，2011）。ただし、挙手は単独の行動というよりも、教師の発問があり、児童の挙手が行われ、教師が指名するという一連のコミュニケーションの中で発現する行動である（澤邊・岸・野嶋，2008）。発問は全体に向けられることが多いので、本研究では、実際の授業場面の「挙手—指名」という一連の行動に着目し、観察調査を行い検討する。

こうした「挙手—指名」は授業の雰囲気によっても出現頻度が異なると考えられる。このことを布施・小平・安藤（2006）も指摘しており、また、授業の雰囲気によって挙手の頻度が異なることが澤邊・大久保（2007）の質問紙調査で明らかになっていることから、授業の雰囲気によって「挙手—指名」の割合は異なるといえる。授業の雰囲気の測定については、学級の雰囲気を測定する尺度は数多く存在するが、授業の雰囲気を測定する尺度はあまり開発されていない。したがって、岸・澤邊・大久保・野嶋（2010）の授業雰囲気尺度は第三者が授業の雰囲気を評定するために開発された尺度であるが、これを児童用に改変して用いることとする。

授業への動機づけの測定については、自己決定理論に基づいて測定する。自己決定理論とは Deci & Ryan（1985）の内発的動機づけに関する一連の研究をまとめたものである（Ryan & Deci，2000）。Deci & Ryan（1985）は内発的動機づけと外発的動機づけは明確に分かれているものではなく、相対的な自己決定性（自律性）の程度によって区分できると主張している。この観点から、安藤・布施・小平（2008）は授業への動機づけの尺度を作成しており、積極的授業参加行動との関連を検討している。したがって、本研究では、安藤・布施・小平（2008）の授業への動機づけの尺度を用いることとする。

以上を踏まえ、本研究では、授業に積極的に参加している児童は授業への動機づけが高いのかを教室授業場面の中で検討することを目的とする。具体的には、授業中の行動の中でも「挙手—指名」に焦点を当て、授業への動機づけとの関連について、授業雰囲気による学級別に検討する。

方 法

調査協力者 小学校 3～6 年生の 7 学級 265 名（男子 133 名，女子 132 名）が調査に参加した。

質問紙調査の手続き 質問紙調査を実施する際には，調査者が質問紙を配布・回収した。児童が回答する際，フェイスシートに学級と出席番号を記入してもらい，観察調査の結果と照合できるようにした。回答終了後，回答用紙を封筒に入れ，封をしてもらった状態で回収した。こうすることで，児童の回答内容が他人に知られ，児童の不利益とならないよう配慮した。

質問紙調査の内容 ①授業への動機づけ：安藤・布施・小平（2008）の動機づけ尺度 20 項目を使用した。この尺度は，自己決定理論に基づいて作成され，「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化的調整」「内発的調整」をそれぞれ測定するものである。「低自律的外発的動機づけ（外的調整と取り入れ的調整）」「高自律的外発的動機づけ（取り入れ的調整と同一化的調整）」「内発的動機づけ（内発的調整）」の 3 因子から構成されている。回答形式は 4 件法である。②授業雰囲気：岸・澤邊・大久保・野嶋（2010）の授業雰囲気尺度 18 項目を児童用に修正した尺度（大久保・澤邊，2007）を使用した。この尺度は，学級の雰囲気ではなく，授業の雰囲気を測定するものである。「統制的雰囲気」「自由・積極的雰囲気」「喧騒的雰囲気」の 3 因子から構成されている。回答形式は 5 件法である。

観察調査の手続き 調査対象授業を学級担任が各学級の教室で行っている授業（具体的には，国語科，算数科）に限定した。そして，各学級時間の観察調査を実施した。その際，学級全体が移るように，教室前方に固定カメラ 2 台と教室後方に手動カメラ 1 台を設置し，映像と音声を記録した。

観察調査の内容 ①挙手：藤生（1996）の研究を参考に，児童が発言機会を得るための挙手（例えば，自分の導いた答えや自分の知識，自分の考えを発言したいときなどの挙手）の回数を計測した。②教師からの指名：児童が挙手しているかどうかにかかわらず，教師から指名された回数を計測した。③児童からの指名：ある児童が別の児童から指名された回数を計測した。④被指名：②と③を合計し，児童が指名された回数を算出した。①～③を計測する際には 2 名で評定し，一致率を算出した。評定が不一致であったものについては，評定者間での協議により最終決定した。また，各授業で挙手や指名の機会数が異なるため，児童が挙手した回数や指名された回数を各授業における挙手や指名の機会数で割ることにより，各児童の挙手率および指名率を算出し，分析に使用した。

現段階のまとめと今後の方針

児童が認知している授業雰囲気の学級ごとの得点をもとにウォード法によるクラスター分析を行い，調査協力学級を分類した（図 1）。その結果，大きく 3 つに分類することが妥当であると判断した。クラスター 1 は，統制的雰囲気が高く，自由・積極的雰囲気が低く，喧騒的雰囲気が低いことから「統制型」学級とした。クラスター 2 は，統制的雰囲気が低く，自由・積極的雰囲気も低く，喧騒的雰囲気も低いことから「無気力型」学級とした。クラスター 3 は，統制的雰囲気が低く，自由・積極的雰囲気が高く，喧騒的雰囲気が高いことから「自由・喧騒型」学級とした。

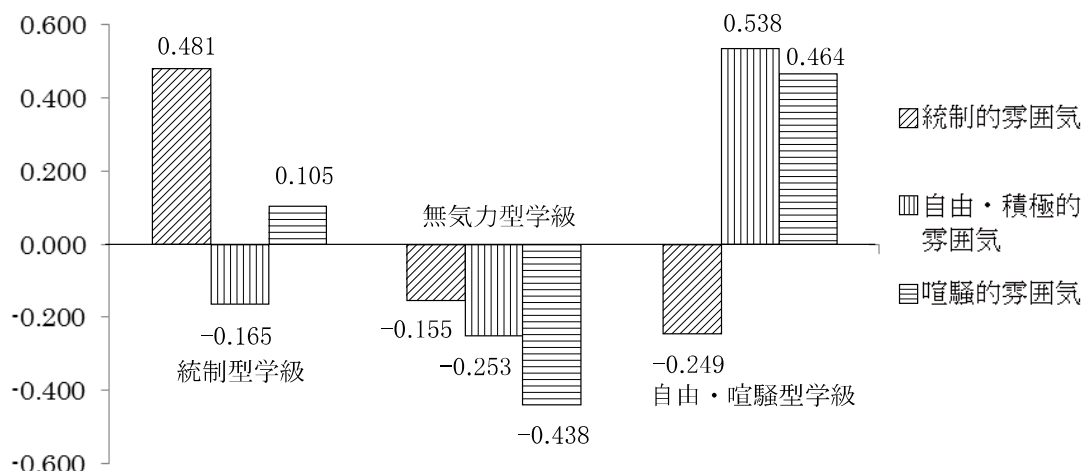


図 1 クラスターごとの授業認知尺度の標準化得点

現在、授業中の児童の「挙手一指名」の回数を測定中である。今後は、クラスター分析によって群分けされた学級ごとに、「挙手一指名」と「低自律的動機づけ」「高自律的動機づけ」「内発的動機づけ」の観点から、授業への動機づけの関連を検討する予定である。また、「挙手一指名」の性差および学年差についても検討を行う予定である。そして、積極的授業参加行動が学級の中でどのような意味をもっているのかを考察していく予定である。

引用文献

- 安藤史高・布施光代・小平英志 2008 授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響：自己決定理論に基づいて 教育心理学研究, **56**, 160-170.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. 1985. Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York : Plenum.
- 布施光代・小平英志・安藤史高 2006 児童の積極的授業参加行動の検討：動機づけとの関連および学年・性による差異 教育心理学研究, **54**, 534-545.
- 江村早紀・大久保智生 2011 授業場面における児童と教師のコミュニケーションと児童の授業への動機づけおよび学級への適応との関連 香川大学教育実践総合研究, **22**, 177-183.
- 岸俊行・澤邊潤・大久保智生・野嶋栄一郎 2010 学生・教師を対象とした異なる学級における授業雰囲気の検討：授業雰囲気尺度の作成と授業雰囲気の第三者評定の試み 日本教育工学会論文誌, **34**, 45-54.
- 大久保智生・澤邊潤 2007 児童の授業認知が挙手に関する信念および行動に及ぼす影響 (1) : 性差と学年差の検討 日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会発表論文集, 78-79.
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. 2000. Self-determination theory and the facilitation of intrinsic

授業に積極的に参加している児童は動機づけが高いのか？

motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.

澤邊潤・岸俊行・野嶋栄一郎 2008 教室授業場面における教師の指名行動に関する一検討 日本教育工学会論文誌, 32(Suppl.), 165-168.

澤邊潤・大久保智生 2007 児童の授業認知が挙手に関する信念および行動に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 80-81.

